
嵐に巻かれた日

AAX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嵐に巻かれた日

【Nコード】

N3799W

【作者名】

AAX

【あらすじ】

猛風に煽られながら、日向拓海ひゅうがたくみは自室のあるアパートを目指す。白滝の雨粒に映るのは、彼女と過ごした甘い思い出。彼は初めての“別れ”を噛みしめる。

別に今日でなくても良かったのに。

横殴りの雨を浴びながら、国道沿いの歩道をとぼとぼと歩いていく。コンビニで買ったビニール傘は暴風に巻き上げられてしまった。例え持っていたとしても使っていたか怪しい。確実なのは、傘と交換した五百円玉が無駄になった事実。

出会い頭に発せられた彼女の一言が脳内で渦巻いている。自分から呼んでおいて、可及的速やかにご退室を強要した女。久しぶりの再会を期待していたのは僕だけだったようだ。

風は地上から様々なものを浚っていく。道端に捨てられた紙屑や空き缶が空中で踊り狂っている。雨の中のダンス。それは淫美なりズム。もつれ合う二人……

紙屑は空の彼方へと吹き上げられ、空き缶は壁に衝突して地に墜ちた。止めよう。もう終わってしまったことだ。この思い出は僕に益をもたらさない。唸りを上げる風になにもかもを預けてしまおう。

彼女とは中学校からの付き合いだった。僕たちは同じ日に陸上部に入部し、それが縁でしばしば行動を共にした。あの頃の僕は恋愛に疎く、彼女と肩を並べて走っているときも、ただ、彼女の男勝りの体力に感心していただけだった。

いつから彼女を女として意識するようになったかは思い出せない。僕は、ある日ふと彼女に惚れていることに気が付いた。それは三年になり陸上部を去った日からも知らない。高校受験を間近に控えた中学三年の秋、僕はそれとなく彼女から志望校を聞き出した。彼女が口にした高校名は偏差値が六十以上もある有名校のものだった。

クラスで最下位争いをしている僕ではとても受かりそうにない高校だ。

その日以降、僕は夜通し勉強に励んだ。

高嶺由里^{たかね ゆり}。彼女は太陽のような人だった。日に焼けた、女子にしては大柄な体。陸上部だったときは明るい黒髪を男のように短くしていた。好奇心が旺盛で、いたずらっ子のような赤茶の瞳をくると動かして、いつでもどこでもころころと笑っていた。クラスのリーダー的存在で成績優秀。僕にとっては、まさに高嶺の花のような女の子だった。

三十九度の高熱を出してすら鉛筆を離さなかった奮闘は空しくも潰え、僕は試験に落ちてしまった。五百点満点中の三百九十二点。当時の僕にしては驚嘆すべき成果だ。親や担任は懸命に僕を励ましてくれたが、落選を知った僕の心は深くえぐれ、結果発表から後の一週間は自室に引きこもった。僕の部屋は二階にあっただので、頭を下にして窓から飛び降りたら死ぬるのではないだろうかと常に考えていた。実際、それを何度も実行しかけた。

肉体であれ精神であれ、永遠に癒えない傷というのはなかなか存在せず、また生きていれば腹が減るので、食料を調達しようとしてリビングに向かった僕を捕らえた両親の涙ながらの説得に心を打たれた僕は、翌日から引きこもりを辞めた。

卒業式の日、僕と彼女はメールアドレスを交換した。肩まで伸ばした黒髪をふわりと浮かせ、微笑みながら結果報告をしてくれた彼女の姿に、僕は完全に心を奪われた。そして、もう二度と近くには居られないのだという悲しい思いに囚われ、喉の奥が苦しくなった。

彼女とは程なく再会した。春期休暇のあいだ、小金を稼ごうとしてアルバイトに入ったファミレスの一席に彼女が居た。後に知ったが、そこは彼女の実家に近い場所であり、そのため彼女は良くそこを利用していた。僕はファミレスのアルバイトを春期休暇の一ヶ月

で辞めるつもりだったが、気が付けば二年と半年も続けていた。無論彼女と話すためである。結局、ファミレスは経営不振で潰れてしまったが、最後のほうは古参として皆から頼りにされた。あの時に培った接客術と包丁裁きは今でも役に立っている。

ファミレスでの会話を通して僕と彼女は急速に接近していった。高校一年の夏が終わる頃には、バイト仲間が僕たちを指して「バカツプル」と揶揄するくらいには、僕たちの仲は進展していた。

決定的となったのは、その年のクリスマス・イブ。午後九時半、いつものように一人で入店してきた彼女は、僕が案内した席に身を埋めて泣いた。このファミレスの店長は人が良い、というか、気が弱い人物だったので、まくし立てる勢いで早上がりを懇願すると、直ぐに諒解してくれた。

あの日なぜ彼女が泣いていたのか、その真相は未だに分からない。嗚咽と共に吐き出された曖昧な言葉を繋ぎ合わせてみると、どうやら彼女は一番の親友に裏切られてしまったらしい。なにが原因で、どのような風に裏切られたのかは知らない。彼女はひどく錯乱していた。そして、その日僕は初めて彼女の部屋に上がり込んだ。

「僕が君を守ってあげる」

一月の寒気は僕たちを密着させた。僕の腕にすっぽりと収まった彼女は、ビクリと身体を震わせ、潤んだ瞳で僕を見た。彼女は小さく肯いた。

高校時代の残りの二年間は、僕の一生のうち、最も輝かしく、また最も色彩溢れた期間となるだろう。カレンダーに赤く塗られた祝日のようなものだ。僕たちはバイトで貯めた金を使っているんな事をした。いろんな場所へ旅行に出掛けた。この一日全てが特別な日だった。春には花見をして、夏には祭りに参加した。秋になると二人で毎日散歩をして、冬になったらベットで身体を暖めあった。年中行事がひたすらに待ち遠しかった。四季の豊かな国に生まれたこ

とを心から感謝した。

僕たちは大学も別だった。彼女は関西の国立大学の推薦を貰い、僕はセンター試験を受けて東京の私立大学に合格した。当時の僕は二人の将来に全く不安を持っていなかった。「距離ではない」。今後しよつちゆう呟くことになる励ましの言葉の、初めの一回だった。僕は大学でバンドのサークルに入った。観衆の前でギターを弾くことは昔からの憧れだった。彼女もサークルに入ったようだったが、そのサークルがどのような活動をしているのか僕は知らない。知らされていない。

僕たちはたった数ヶ月で疎遠になった。これは驚くべき変化だ。半年前には二人で笑い合っていたのに、大学に入った途端に、まるで他人同士のような関係になってしまった。彼女は身内ではないから他人と言うのは正しいのだが、それでも、僕は彼女のことを親よりも身近に感じていたし、また、誰よりも深く愛していた。つもりだ。

彼女とは夏に一度再会した。僕は懐かしさと嬉しさのあまり彼女を抱きしめようとしたが、それとなく拒絶されてしまった。僕は衝撃を受けたが、平静を装った。だが、彼女と話していくうちに、僕は、僕たちの間に生成された、修復し難い溝が存在していることに嫌でも気付かされた。帰路、頭上で鳴き喚く蝉たちがやけにうるさかったのを覚えている。

一年後の春、僕は再び彼女と待ち合わせた。何故か。僕は未練がましくも期待していた。分の悪すぎる希望に縋っていた。あの時の彼女はただ戸惑っていただけなのだ。単に接し方を忘れてしまっていただけなのだ。

僕たちの溝は、縮まるどころか更に深くなっていた。そして、彼女の容姿もすっかり変わっていた。髪を背中まで長く伸ばし、茶色に染めていた。顔は上品に化粧が施されていて、耳には銀のイアリ

ングがぶら下がっていた。まるで別人だった。旅先の砂浜を犬のようにはしゃぎ回っていた高嶺由里は、たったの一年で大人の女になっってしまった。

君は誰だ。その台詞が口から何度も出かかった。彼女は実家に招待すると言ったが、辞退した。同時に僕の胸を焦がしていた恋心もようやく褪めた。

それから更に一年が経過した。だらだらと無為な生活を続けていたとある春の日、僕宛に一通のメールが届いた。差出人不明。内容は『鞆を忘れていったよね』という一文と、僕がアパートを借りている町に建てられた、高価そうなホテルのアドレスが載っているのみ。鞆とは、僕が一年前の春に紛失した黒い鞆のことだった。

そして本日。はやる気持ちを抑えきれず、彼女が滞在することになったホテルの、その初日に彼女のもとに向いた。その結果は冒頭の通り。心が萎れる音が聞こえた気がした。

嵐は未だに収まらず、むしろ悪化している気配さえ見せている。自力で歩いているのか、風に歩かされているのか、もう分からない。こんな日に外出をしようとする者など僕をおいて他には居なく、いつもはひっきりなしに車が行き交っている国道も、今は閑散としている。

たった一人。耐えがたい喪失感が心を蝕んでいく。ああ。あの紙屑のように空の彼方へと消えてしまえたら。あの空き缶のように壁に衝突して潰れてしまえたら。自滅的な妄想が泡のように浮かんで消えていく。

旋風が足下を掬った。僕はバランスを崩し、水たまりの上に尻餅をついた。尻が痛い。右手で背中をさする。

転んだ拍子に黒い鞆を手放してしまったようだ。もう、中身まで

ぐしゃぐしゃに濡れているに違いない。

何もかもがどうでも良くなった。僕は歩道の上に大の字になって寝ころんだ。そびえ立つ電柱に、宙を走る送電線。ビルに挟まれて窮屈そうな灰色の空を背景に、無数の滴が僕に向かって襲撃をかける。不思議な風景だ。おかしな光景だ。

僕は倒れたまま笑った。声を上げて笑った。笑いすぎて涙が出てくる。涙が凍みて目を開けられない。開けようとも思わない。

風が地上から僕の泣き声を浚っていく。僕は母親から引き離された幼児のように泣きじゃくった。倒れた僕の手を取ってくれる人は、もう居ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3799w/>

嵐に巻かれた日

2011年10月9日15時59分発行